

ネイチャー高知

No 45 2015年7月28日発行

柴田敏隆さんより学んだこと

松本 孝

今では当たり前と思うことが実はそうではない、諸先輩方の苦労や工夫、努力があればこそと思うことが、活動を積み重ねること（年齢を重ねることでもあります）によって気づきます。

自然の保全や再生がいわれ、今では生物多様性といわれます。

その自然の価値を広く伝えること（自然の中で自然の働きを解説し、参加者が親しみを持ち、理解を深める）や、その自然を受け継いでいくこと（関係機関と話を重ね、具体的な手法で自然と人との共存をはかる）で、各地で様々な方たちが活躍されています。

この2つのこと（自然解説・保護活動）を昭和30年代より実践し全国に広め、後世に生きる者の目標であり稀有な存在だった方が柴田敏隆さんです。

当時より自然保護をコンサーベーションと明確に規定され、柴田さんはコンサーベーション（自然保護で話のわかるプロとして携わる人）として活動されてきました。

自然観察指導員に登録されておられる皆様におかれましては日本自然保護協会が主催する講座を受講されております。その講座は私が申すまでもなく、同協会が昭和53年よりはじめた講座で、柴田さんたちが全国で自然保護の担い手となってほしいと念願されたものと聞き、柴田さんは看板講師でした。（日本自然保護協会は NACS-J と表記。The Nature Conservation Society of Japan）

私が柴田さんと出会ったのは平成3年のことです。私は地元の普通科高校卒業後、東京都内の専門学校（環境デザイン専攻）へ進み造園・ランドスケープの道へ入りました。

高知市内に造園・ランドスケープの設計事務所があることを紹介していただき、代表取締役所長とお会いし独特の世界観をお持ちの造園家の方で、卒業後、私はその設計事務所に就職。

入社して数年後の平成3年、所長よりカナダの自然をたずねる機会をくださり、6月に開催された NHK 学園自然観察海外オープンスクールリングでカナダの自然をたずねる8日間のツ

アー（カナディアンロッキーとビクトリア）に参加。このツアーのガイド役が柴田敏隆さんで、他にも引率役や世話係などいろいろな役を兼ねておられ大変お世話になりました。カナダの自然に身を置き、柴田さんの視点でのガイドは大変勉強になり、その後のライフスタイルが自然への思いを強くしていく貴重な体験でした。

カナダでのバスで移動中こんなこともありました。車内より道路沿いにいるクマを見たとき、私は「熊が出た」と言いまして、柴田さんと記憶していますが「熊が出たのではない、あなたが熊のいるところに来ているのです」と言われたことは今も忘れることはないです。帰国後、年賀状でごあいさつをし、これを御縁にその後もお年賀をいただいております。カナダへ行く機会を与えてくださった会社と素晴らしい方との出会いに感謝です。造園は生き物を扱い、私は視野を広げればと日本自然保護協会の会員になりました。私は設計事務所に15年ほど勤務し、会社の組織を離れた後は環境活動を支援するNPO活動などをしてきました。

柴田さんとお会いすることはしばらくなかったのですが、私が平成17年、18年と放課後の子どもの居場所づくりの機会をいただいた際、私は身近な自然（特に暮らしや遊び）を基本にしたプログラムを年間を通しておこない、せんえつながらその実践報告を柴田さんにお送りしておりました。

平成18年に柴田さんよりお便りをいただき、そのときはケガをしていたこと、ガンで胃を半分切除していたことを書かれており、健康でありますよう祈っておりました。私がお送りした報告をご覧になられ、「古い血がたぎる思いをした」と手紙にあり、大変恐縮した次第です。

そう思われたからでしょうか、柴田さんが様々な誌面等に執筆された貴重な内容をたくさん送っていただきました。それは私の仕事に関係あり、かつ参考になりそうなものを思っただけで、そのお気持ちに本当にありがたかったです。

私は平成13年に京都で自然観察指導員講習を受けた者です。地方に住む私にとって講習後の具体的な地元での実践にあたり、柴田さんよりお送りいただいた内容は、特に子どもたちとおこなう自然観察では私の基本となり何度も繰り返し拝読しました。その中で私が指標としてありがたく感じ基本中の基本となったのが、柴田さんが日本自然保護協会理事のところに記された「こどもと自然・自然保護—お母さん、お父さん、教育現場の指導者の人へ—」。主な項目は以下となっています。

●近頃おかしい日本の子ども（忍び寄る「幼衰」の危機）

●なぜ自然か？ ●自然の中で遊んだ経験の少ない親

●理想の大人像（※豊かな自然接触を成就するために ※幼児に望ましい基礎的自然体験 ※こどもの発達段階に応じた自然体験 ）

●自然保護への指向 ●自然接触の TPO（いつ、どこで、だれが、どのように）

また「子どもに親しまれる指導者像」の記載内容では、「先ず大きな声で挨拶をしよう。子どもの方から挨拶するのが礼節などとお高くとまってないで、機先を制して一発噛ます方が絶対有利である」とあり、私にとって背中を押してくれる言葉でした。

他にも音や感性に関すること、野外活動に関すること、自然の中の危険とうまくつきあう等、たくさんあり、挙げたらキリがないです。

平成18年の頃、柴田さんよりお手紙を3回いただきました。

執筆内容に関して高知であった話をご自身が添えたメモ書きで知ることがありました。それは「これではいけない、少年自然の家」と題して3回にわけて記述した少年自然の家について問題提起の内容です。昭和55年とあります。

大自然の中にありながら自然に目を向けない「少年自然の家」のあり方はこれでよいのかと編集者と思われる方の前置きの後、柴田さんの手厳しい現況批判、心に描く理想像が記されています。メモ書きにこうありました。

「室戸の国立少年自然の家で全国の所長会議があってこれが話題提供されたといえます。

「面白くないけれどコイツの云うことは確かだ！」と云われたそうです。その後、室戸の少年自然の家を訪ねたら「あなたが、あの柴田さんですか！」と云われました。その後、変わりましたかな？」

柴田さんは四国内では高知県に一番行っていて1970年～75年くらいまではカワウソを調べに土佐清水に通い、地元のカワウソ調査に参画され、当時は確実にいたと、お手紙をいただいた平成18年では絶滅したとみているとありました。

柴田さんは復活の戦略を考えていたそうですが歯がゆい限りともありました。他にも四万十川や愛媛県側、吉野川の水源地から河口まで行かれたとあります。

私は平成13年に発足し継続している道路に関する活動の一環で、道路環境研究所が開催する「みちと自然シンポジウム」を知り、私は平成20年の研修に参加しました。柴田さんは「野生動物（ワイルドライフ）に配慮した道路づくり」の講演をされ、いつか研修に参加したいと思っていました。その研修に行く前に柴田さんにお手紙をだし、当日、少しの時間で

したがお会いすることができました。柴田さんが講演で話された以下のことは特に印象に残り忘れることはありません。

「コンサーベーションは自然を賢く使うこと、道路も、自然の生き物も、という考え」
その後もお年賀でいただいております、ここ数年、お年賀はなかったですが、とにかくお元気でと祈っております。

今回、あらためて柴田さんよりのお手紙を見まして目に留まった言葉がありました。初めて読んだ時感じていたとは思いますが、私もそれなりに年を重ね、その深みに気づくようになったということでしょうか。その言葉です。

「私は少年時代の凄まじい戦争体験から、生きることの意義、生命の尊さを強烈に意識して自然保護と生命の尊重に志しました」

9月にお別れ会があります。会場が横浜市（JR 石川町駅近く）ということで、横浜市石川町は私が学生の頃に住んでいた所で石川町駅は毎日利用していました。私にしてみたら柴田さんがつないでくれた何かのご縁なのだろうかと思うと不思議な感じがします。

柴田さんと直接会って過ごした時間はいろいろな活動をご一緒された方と比べれば、私にはるかに短いですが、いただいた資料やお年賀にある言葉ひとつひとつが柴田さんそのもので私にとって支えでありました。

ただただ感謝の思いで、これからを生きる者として生きる方向を間違わないよう、昔から今に伝えることを大事にし、諸先輩方より学んでいき次へ伝えていくことに少しでも寄与できたら
の思いです。



みちと自然シンポジウムで講演の柴田さん（平成20年）。カナダではバンダナ姿が印象に残る柴田さん。この講演ではしていないと思うのですが…。

北海道の屋根・大雪山を歩く

私は15年以上前からほぼ毎年、7月の初旬に同じメンバーで大雪山や知床など北海道の山歩きに出かけているのですが、今年も7月9日から14日の日程で大雪山に行ってきました。層雲峡で前泊、銀泉台から入山して、白雲岳避難小屋のテン場をベースに3泊4日間、期間中は全て晴れという最高の山旅でした。大雪山の魅力は、今なお原始の姿をとどめ、北海道の屋根と呼ばれる広大な山塊に見渡す限りのお花畑、そこに息づく貴重な動植物たちをごく身近に観察できる、とてつもなく大きな自然です。今年は、雪解けは早かったものの、5、6月の気温が低く、花は例年より10日前後遅れている感じでした。白雲のテン場に顔なじみの蝶の研究・写真家の渡辺氏が居ました。彼はテントで1ヶ月間滞在してウスバキチョウなど高山蝶の観察を続けていたそうです。ちなみに、北海道では、山小屋泊の場合も避難小屋ですから、寝具や食糧関連の装備を詰めるとザックは結構な大きさになります。設備が充実している本州の山小屋泊とは全く状況が違うのです。小屋のトイレ事情でも、ゴミ軽減のため使用済みのペーパーまですべて持ち帰ります。



大雪山の固有植物はホソバウルップソウ、ダイセツトリカブト、ジンヨウキスミレなど7科11種（亜種、変種を含む）が知られています。固有ではないが、キバナシオガマやヨコヤマリンドウなどは日本での分布は大雪山系に限られるようです。今回の山行でも、どこまでも続く稜線に百花繚乱の高山植物が咲いていて、皆、夢中で撮影していました。被写体のバックには、忠別岳やトムラウシ山、残雪の旭岳、白雲岳に青空をと、思い思いのアングルでカメラにおさめていました。ホソバウルップソウが特に綺麗で、イワウメ、エゾオヤマノエンドウ、チョウノスケソウ、チンブルマ、ミヤマキンバイ、エゾイワツメクサ、エゾコザクラ、コマクサ、キバナシャクナゲやジムカデなどツツジの仲間などなど多種の花を撮影。また、植物だけでなく、ノビタキやギンザンマシコ、ホシガラスなどの鳥類やウスバキチョウなどの高山蝶やナキウサギ、エゾシマリスも身近に観察できました。ただ、コマクサの群生地にもエゾシカの踏み跡がみられ、今後生態系に影響を及ぼすことが懸念されます。

大雪山で観察できるスミレ

12日、忠別沼の木道沿いで今まで1度も観ることができなかったスミレを探していました



忠別沼とタニマスミレ (下)

た。「あれは？」メンバーの一人野鳥の会の西村氏の声。振り向くと、木道の反対側にまさしく！目的のタニマスミレでした。別の場所でも1輪咲いていて僅か2輪でしたが、感動の瞬間でした。前述の渡辺氏の情報では、タニマはまだ咲いていないとのこと、諦めていただけにことさら嬉しい出会いでした。タニ



マスミレはアラスカからシベリアまで分布するが、日本では大雪山などごくわずかに自生する稀少種。十数年来、観たいと思い続けたスミレを最初に見つけられなかったのは唯一残念な事でした。礫地の所々にエゾタカネスミレが群落を形成し、固有種のジンヨウキスミレはダケカンバの小低木の林床や草地に多く生育しています。登山

口の周辺ではウスバスミレやキバナノコマノツメが観られます。

2台のカメラで600コマを撮影。「天気良すぎ〜！」とグチリながらも、自然との一体感を実感して、とても清々しい山歩きができたことに感謝、感謝でした。



ジンヨウキスミレ



エゾタカネスミレ

異国に生きる

田城 光子

仕事を辞めて十数年、コーヒーを飲みながら朝の連続ドラマを見るのが日課になった。「マッサン」のヒロイン、エリーさんの生き方にも感動した。あの時代に、言葉や文化の異なる国で暮らすということはたいへんなことだったろう。時代はずっと近くなるが、うちの親戚にもスコットランドからお嫁に来た人がいる。彼女のご両親から「ぜひ私共の国へも遊びにおいでください」とお招きをいただいた婿殿の父親は「白い飯と味噌汁のない国には行けん」と頑固に拒み続け、ついには母親ともども、もっともっと遠い所へと旅立ってしまった。わたしもこの父親同様、米飯に味噌汁、それに漬物の無い生活は一日も考えられない。その上、大の飛行機嫌いときている。気軽に外国を行き来することなど想像すらできない。もし言葉もわからず米飯も食べられない国へ放り出されたら、いつとも生きていけない、とても弱い人間なのだ。それに比べ、「植物は偉い」と、いつも思う。帰化植物とか外来種とか呼ばれる植物がある。本来の自生地から様々な経緯で地球上のあちこちに運ばれ、気候風土の違う土地にもしっかりと根付いて子孫を増やしていく。

今年も我が家の近くの道路わきや水田の土手で、オオキンケイギクがたくさんの花を咲かせた。オオキンケイギクは北アメリカ原産、明治の中ごろに観賞用として栽培されたらしいが、その後、道路法面などの緑化目的で播種されるようになり、旺盛な繁殖力で分布を広げていき、今ではその勢いが生態系に悪影響を及ぼすと考えられている。平成18年に施行された「特定外来生物法」で特定外来植物に指定された。栽培や移動が禁止され、生育場所では早期の刈り取りを促しているが、ほとんどの住民はこのことは知らない。コスモスに似た鮮やかな黄色の花は人目を惹き、草刈の時には花は必ず刈り残される。除草作業をしている人たちに、残さず刈り取って欲しいとお願いしたことがあったが、「きれいな花を残すのがなぜ悪い」と思ったのだろう、なかなか理解してもらえなかった。セイタカアワ



オオキンケイギク (2010年5月 高知市高須)

ダチソウも同じく、明治時代に観賞用として持ち込まれた。現在大繁殖しているのは、戦後、進駐軍の貨物の中に種子がまじっていて、そこからあちこちに急速に分布を広げたものらしい。日本の野山にも咲くわたしの好きなアキノキリンソウの仲間なのだが、セイタカアワダチソウを見てもあまりきれいだと思えないのはなぜだろう？ それはあまりにもたくさん咲きすぎて見飽きてしまったこと、そして、花粉症の原因だと考えられていたことではあるまいか。実際、セイタカアワダチソウは虫媒花なので花粉はほとんど飛散せず、アレルギー性もないということではあるが、長い間おおかたの人にそう思いこまれていたために、誤解をとくのはなかなか難しいようだ。ある時、人の集まる場所に花を飾るためこの花はどうかと提案したら、周囲の人たちからたいへんひんしゅくをかった。またセイタカアワダチソウの地下茎や根からはある特殊な化学物質が放出され、これが周囲の植物の発芽や成長を妨げているということも、この植物が悪者の代表格とされるようになった原因だろう。花は目立たず、害だけが大きいものもある。最近、高知県西部のあちこちでは、メリケントキンソウが確認された。同じ南アメリカ原産のシマトキンソウはタバコ畑などで以前からよく見られたが、こちらは県外ナンバーの車が多く出入りする駐車場や宿泊施設の庭などで見られる。羽状に深裂した葉が地表に広がり、カブトガニに似た瘦果の先には鋭い棘があって、触れるととても痛い。この棘でタイヤや靴底にくっついて分布を広げているのだろう。棘だらけの草が大群生している様子を見る限り、メリケントキンソウは悪者以外の何者でもない。

逆に日本から外国にわたって大きな問題になっている植物がある。アメリカでのクズや、ヨーロッパでのイタドリである。特にイタドリは、草丈3メートルにもなりコンクリートを壊し その被害は著しいという。「ヨーロッパ 史上最悪の帰化植物」と言われ、英国では栽培が禁止されたそうだ。日本でのセイタカアワダチソウやオオキンケイギクの比ではないらしい。19世紀にイタドリをヨーロッパに送ったというシーボルトも、まさかこんなことになるなど夢にも思わなかつただろう。春、食材として芽の出るのを待ち焦がれる高知県人としては、たいへん悲しく思う。英国では勢いを弱めるために、日本からイタドリの天敵である虫を導入するとあるが（もうすでに導入されているのかもしれない）、このことがさらに生態系をおかしくしてしまわないかと、素人のわたしは心配する。いずれにしても、多くの生物を「悪者」にしてしまったのは、他にもないわたしたち人間である。身なりをちっともかまわない夫が、海外に行くたびに靴だけはいつも新調していた。種子を移動させないための配慮だと言った。小さなことだが、とても大切なことかもしれない。

オオイヌノフグリはその珍妙な名前にもかかわらず、早春を代表する野草として、多くの人に好まれる存在になっていると思います。この珍妙な名前「ふぐり」をめぐっては少々恥ずかしい思いをしたことがあります。「ふぐり」はほとんど使われない言葉ですが、ご承知のとおり「きんたま」のことです。20年くらい前になりましたが、ある観察会において、参加していた小学生の男の子に『ふぐり』で知っちょう？『ふぐり』というのはねえ・・・と話しかけたところ、隣にいた母親と思われる女性から「この子、女の子ですけど・・・」。肌の色は私くらい、元気な男の子と思って声をかけたもので、『ふぐり』を持ち合わせていないとは思ってもよかったです。

日本の自然にすっかり溶け込んでいるオオイヌノフグリですが、ヨーロッパ原産の二年草で、明治初期(1,870年頃)に帰化植物として日本に入ってきた植物(牧野新日本植物図鑑)です。今はオオイヌノフグリが早春を代表するような立場にいますが、オオイヌノフグリが日本に入ってくる前は、在来種のイヌノフグリがその位置にあったと考えられます。オオイヌノフグリが分布域を急速に拡大する一方で、在来種のイヌノフグリは減少し、環境省のRed Data Book 2014では絶滅危惧Ⅱ類にされています。私が植物を本格的に調べだしたのは15年程前ですので、イヌノフグリは石垣の基などでたまに見るだけの珍しい植物になっていました。

前置きが少し長くなりましたが今回「ヘーえ」と驚いたのは、外来種オオイヌノフグリがイヌノフグリに置き換わる過程と、オオイヌノフグリの進出に対応してイヌノフグリが適応して形態や生息場所を変え、生き残っていることです。以下ゴシック体の部分は滋賀県立大学高倉耕一准教授の論文をまとめたものです。

イヌノフグリとオオイヌノフグリの間の繁殖干渉は一方通行

イヌノフグリとオオイヌノフグリが同じ場所で生育し、お互いの花粉が混合する環境で種子の結実状況を観察すると、イヌノフグリの種子数が人工授粉実験では60%（移植実験では50%）に低下したのに対し、オオイヌノフグリの種子減少はごくわずかであった。イヌノフグリとオオイヌノフグリが同じ場所で生育した場合、両種がともに生育することはなく、オオイヌノフグリの一人勝ちになる。かつてイヌノフグリは、現在オオイヌノフグリが生育しているような人家近くの路傍、畑などに普通に生育していたが、オオイヌノフグリの侵入に伴ってその場所を追われ、現在は石垣などに細々と生き残っている。

石垣環境への対応

イヌノフグリは種子に肉質の組織（エライオソーム）があり、これをアリに提供して種子を散布してもらっている。石垣に生育するイヌノフグリは、アリに種子を運んでもらう機会を多くするために、果実が上を向いた状態で裂開する。一方地面に生えているイヌノフグリは果実を下向けて裂開する。この下を向いて裂開するのは能動的な反応で、花の咲いている間花柄は横か上を向いているが、花が終わると、屈曲をはじめ果実が成熟するころには完全に下を向く。石垣に生育するイヌノフグリは、花の終わった後の花柄の屈曲が抑制され、花が終わった後も上を向いた状態を維持し、果実が裂開する。



オオイヌノフグリ



イヌノフグリ

今回のイヌノフグリの事例は、在来種と外来種の繁殖能力違い、在来種の外来種の侵入してこない場所への逃避と環境への適応など「へーえ」と驚いてしまいました。ただ私の知っているイヌノフグリの生育地は、石垣のなかというより基部の地面の部分です。また、果実も横向きあるいはやや下向きで上を向いて裂開しているイヌノフグリはまだ見たことがありません。適応の途中段階かもしれません。

イヌノフグリのように、在来種に近い外来種が侵入してきたことによって、在来種が減ってしまった他の例としてオナモミがあります。イヌノフグリについては、多くはないものの、私自身でも県内数か所で確認しましたが、オナモミは見たことがありませんし、高知県植物誌の調査でもはっきりオナモミと同定できる個体は採集されていません。オナモミも大オナモミと競合しない場所に逃避し、生きながらえていることを念じています。



左：イヌノフグリの生育環境 石垣の基部

右：イヌノフグリの果実

野山での拾い物 ふかい 腐海の王 **おうむ** 王蟲

坂本 彰

王蟲は、宮崎駿の作品「風の谷のナウシカ」に出てくる腐海の王である。その王蟲のフィギュアでなく、生きた王蟲が牧野植物園の本館と展示館をつなぐ通路にいた。もちろんサイズは王蟲よりはるかに小さい。よく観察すると、王蟲には14個ある目が2個しかない、足は6本など、王蟲ではなかった。昆虫の幼虫であろうと思われたが、それにしても、全体の雰囲気はやはりあの王蟲である。



オオヒラタシテムシの幼虫

子どもが高校を卒業するまでの間、子供たちの本棚には教科書と一緒にコミック本が並んでいた。というより、教科書は机の上のわずかなスペースに並べられ、本棚はコミック本で占められていた。卒業と同時に本棚は私のものになり、コミック本は段ボールに入れたが、風の谷のナウシカだけは本棚に残した。全7巻を一気に読み通すことは少ないが、ときどき取り出して読んでいる。風の谷のナウシカには、いろいろな「蟲」が登場するが、その中でも王蟲は特異な存在であり、強く印象に残っている。

ネットで調べると(最近は図鑑よりネットで検索する方が多くなった)、通路にいた「王蟲」はオオヒラタシテムシの幼虫であった。オオヒラタシテムシは、通路でよく見かけていた。通路ではミミズの死骸を見かけるが、ヒラタシテムシはこのミミズを目当てに出没しているのだろう。

それにしても、繰り返しになるが、全体の雰囲気はやはり王蟲である。王蟲は宮崎駿が作り出した架空の蟲だと考えていたが、ひょっとしたらこのヒラタシテムシの幼虫がモデルかもしれない。一度確かめてみたくなった。



オオヒラタシテムシの成虫

観察会案内

初秋の草原の植物観察会

皿ヶ峰は市街地のすぐ傍にある草地として、西日本でも貴重な存在になっています。皿ヶ峰の草地に咲く、秋の草

花の観察会です。

日時 2015年9月5日(土曜日) 午前9時から

場所 高知市高見町皿ヶ峰

(9時に筆山第3駐車 皿ヶ峰登山口集合)

講師 稲垣典年(当会会長・牧野植物園)

参加費 無料

持ってくるもの 筆記用具 あれば図鑑

参加希望者は事前の申し込みをお願いします。

行事案内

夏休み!! 物部川で遊び学び教室

- 【日時】 平成27年8月19日(水) 10:00~15:30
【場所】 物部川左岸 上岡山の川側
【内容】 午前中は水質調べ 午後は川遊び
【主な対象】 小学生3~6年生(保護者同伴可)
【募集人員】 30名程度(先着順)
【参加費】 無料
【持ち物】 お弁当、飲み物等は持参。
ライフジャケット・水中メガネ等の機材は、主催者側で準備します。
【応募方法】 メールまたは電話で申込み
【問合せ・申込み】
物部川21世紀の森と水の会(常石)
TEL: 090-4784-5707 E-mail: mori_kawa_tune@yahoo.co.jp

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO 45

事務局 780-8075

高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp